

第44回定期演奏会



京都フィロムジカ管弦楽団 第44回定期演奏会

2018年12月23日(日) 午後2時開演

滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール(大ホール)

1時15分よりロビーコンサート開催

《 曲 目 》

セルゲイ・ラフマニノフ／交響曲ニ短調『ユース・シンフォニー』(約15分)

Сергей Рахманинов (1873-1943) : Симфония ре минор

—休憩—

アントン・ブルックナー／交響曲第5番 変ロ長調 (原典版) (約90分)

Anton Bruckner (1824-1896) : Sinfonie Nr. 5 B-dur (Originalfassung)

I. Adagio - Allegro

II. Adagio. Sehr langsam

III. Scherzo. Molto vivace (schnell)

IV. Finale. Adagio - Allegro moderato

指揮：池田 俊

京都芸術センター制作支援事業

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

指揮者

池田 俊 (いけだ しゅん)

兵庫県西宮市生まれ。大阪音楽大学において指揮法を研鑽、トランペットを齊藤広義氏に師事。卒業後、大阪フィルハーモニー交響楽団からのオファーを受け入団。在団中ドイツのデトモルト国立音楽大学へ留学。指揮法、室内楽、トランペットを学び、再び大阪フィルに首席奏者として迎えらる。大阪シュベルマー金管アンサンブルのコンサートにおいて指揮とトランペットを兼ね、[奨励賞] [本賞]を受賞。

1995年、大阪フィルを退団し本格的に指揮活動に入る。1997年、プリズベン国際プラス・フェスティバルに招かれ、クインズランド音楽院でのマスター・クラスでオーケストラに関する演奏法やソロの指導と共にコンクールの審査も務める。

1998年関西フィルハーモニー管弦楽団と共に池田俊 指揮者デビュー・コンサートを開催し、豊かな音楽性を持つ才能ある指揮者！と絶賛され、[神戸っ子]のブルーリボン賞候補に指揮部門でノミネートされる。2001年、ブルガリア国立室内オーケストラを指揮し好評を得る。2004年、ブルガリアに渡欧し、第1回ワークショップにおいてブルガリア国立ソフィアフィルを指揮しディプロマを授与される。2009年、ウクライナのキエフ(リーゼンコホール)においてウクライナ国立交響楽団を指揮し、スタンディングオベーションを受ける。また関西フィル、大阪交響楽団、広島交響楽団、奈良フィルハーモニー管弦楽団、エウフォニカ管弦楽団、ウインドカンパニー管楽オーケストラ等で指揮。近年は大阪市音楽団からも招かれている。アマチュア分野においては京都フィロムジカ管弦楽団、榎原交響楽団、墨染交響楽団、八尾フィルハーモニー交響楽団、立教大学交響楽団、西宮市吹奏楽団、シンフォニックウインズKAGAWA、その他等で客演指揮者として招かれている。

現在はプロ、アマを問わない多彩な指揮活動を行い、特にアマチュアのオーケストラや吹奏楽団などからは演奏向上に力を注いでいる“下町の名指揮者”として評価を受けている。

日本指揮者協会会員、高知大学交響楽団(名誉指揮者)、香芝シティ室内オーケストラ(専任指揮者)、元・奈良教育大学非常勤講師。



曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

ラフマニノフ／交響曲ニ短調『ユース・シンフォニー』

ロシアの人気作曲家・ラフマニノフ 18歳の作品とされる。学生時代に試作した交響曲が忘れ去られて楽譜も紛失し、第1楽章のみが残ったものようだ。そのため『交響的楽章』『ユース・シンフォニー(若書きの交響曲)』などと呼ばれている。ラフマニノフはこの作品の4年後に、同じニ短調で交響曲を書いて第1番とした。それでは、この『ユース・シンフォニー』は、残す価値も無い駄作だったのだろうか？ 答えは「否」である。ラフマニノフの魅力であると同時に弱点でもある特徴は、多様な音楽要素を欲張って盛り込みすぎる点にある。この特徴は、作品を万華鏡のように変化の尽きないものにする一方で、散漫で統一感の欠けた印象を与えかねないという危険性をもはらむ。この『ユース・シンフォニー』も、劇的かつ英雄的な主題、鳥のさえずりのように愛らしいアンサンブル、「これぞラフマニノフ！」と言うべき耽美的な歌、など、多様な要素が短い曲中に詰め込まれている。しかしこの曲では、それらの要素が分かりやすく区切って整理されており、しかも、繰り返しを基調とするクラシック音楽の形式美の中に上手にまとめられているのである。

この傑作が、なぜ忘れ去られたのであろうか？ あるいは、チャイコフスキーからの影響が顕著に表れ過ぎていることが問題視されたのかもしれない。ラフマニノフは12歳でモスクワ音楽院に入り、管弦楽曲をピアノに編曲するなどして作曲のトレーニングを積んだという。おそらくチャイコフスキーの作品を積極的に学んだのだろう。この『ユース・シンフォニー』には、チャイコフスキーを髣髴とさせる場面が多々ある。

もう一つ、これは僕の邪推だが、グレゴリオ聖歌の『ディエス・イレ(怒りの日)』もこの曲に影響を与えた音楽ではないかと思う。『怒りの日』は“最後の審判”への怖れを歌った鬼気迫る歌で、多くの作曲家が引用した。『ユース・シンフォニー』はグラヴェク(「重々しく、深刻に」)と表情指定された序奏から始まり、終盤でこの序奏も再現される。しかし再現部では、提示部に無かった旋律(譜例1a)が、神を象徴する楽器・トロンボーンを主体とする管楽器によって加えられる。この旋律の冒頭は、『怒りの日』の冒頭(譜例1b)と同じ動きなのだ。ラフマニノフは後年の傑作群に、『怒りの日』の旋律を露骨に引用している。それゆえ、ラフマニノフは少年時代から既に『怒りの日』に特別な思いを寄せていたのではないかと邪推したくなるのだ。



譜例 1a ラフマニノフ 『ユース・シンフォニー』より



譜例 1b 『怒りの日』の冒頭

ブルックナー／交響曲第5番 変ロ長調

一昨年、高原英理著『不機嫌な姫とブルックナー団』が出版された。題名から連想される通り、熱狂的なブルックナー愛好者たちを主人公にした小説だ。僕たちブルックナー狂徒の奇妙な生態は、ついに小説の題材にまでなってしまったか、と苦笑しながら手に取ったが、読み出してみると高原氏のブルックナーおよびブルックナー愛好者への理解の深さに感激した。中でも嬉しかったのは、登場するブルックナー愛好者たちが、雇用形態への不満やいじめられた記憶など、何がしかの苦しみを抱えた人物として描かれていた点だ。苦しむ人に

慈愛を届ける音楽、最後は必ず救われるという安心感が得られる音楽、それがブルックナーである。苦しみを抱えた小さな弱い人間にとって、ブルックナーの音楽は、生きるために不可欠なエネルギー源でさえある。そうしたブルックナーの諸作品の中でも、交響曲第5番はとりわけ、苦しむ人間に力を与えてくれる作品である。この背景には、ブルックナー自身が最も苦しい時期に書いた曲だ、ということが反映しているのかもしれない。そこで、交響曲第5番までのブルックナーの半生を振り返ってみたい。

オーストリアの風光明媚な高原の農村・アンスフェルデンで、1824年にブルックナーは生まれた。村人たちは信仰心が篤く、畑の中にまでも十字架やマリア像を安置して、祈りを捧げている。ブルックナーの父は小学校の教師だった。小学校は教会と一体になっており、教師は礼拝の際のオルガン演奏など教会での仕事もしていた。こうした環境から、ブルックナーも熱心な信仰者に育っていく。また、ブルックナーの父親は、夜は酒場の余興にヴァイオリンを弾くアルバイトをしていた。こうした環境は、ブルックナーの音楽の原風景として重要なものになったに違いない。ブルックナーは幼時からオルガンに親しみ、少年時代から父の代理でオルガンを弾くようになった。また、ブルックナーの音楽の魅力の一つである野卑で力強い舞曲にも、農民たちを音楽で景気づけていた父親の姿が投影されているのだろう。しかし、やはり無理がたたったか、ブルックナーが13歳の時に父親は死去した。ブルックナーの音楽のいずれもが巨大で力強い風格を備えているのは、早くに喪ってしまった父性への憧れを音楽で補償しているためだ、とする見解もある。父の死後、少年ブルックナーは、生家から約9キロメートル(徒歩約2時間半)離れたところにある聖フローリアン修道院の寄宿学生となった。この聖フローリアンでの生活が、ブルックナーの人生を決定づける。聖フローリアンの大聖堂の内部は、永遠に続くかと思われるほど長く伸びのある残響を誇り、しかも野太く深みのある音色が魅力的な大オルガンを備えていた。ここでブルックナーは、時に聖歌隊員として、時にヴァイオリン奏者として、そしてオルガニストとして、神に音楽を捧げながら学生生活を送った。そして、ブルックナーは卒業後も、頻繁に聖フローリアンを訪問した。現在、聖フローリアンの地下墓所には、彼の遺言に従ってブルックナーの棺が納められており、彼に對面するために世界中から愛好者が“巡礼”して来る。ここはまさにブルックナーの聖地である。

こうして信仰に裏打ちされた崇高な音楽性と高い教養とを身に付けた青年ブルックナーは、父と同様に小学校教師となる。しかしそれに飽き足らず、バッハをはじめとする音楽の研究にいそしんだほか、礼拝に使う教会音楽を自分で作曲したりした。そして、この地域の中心都市であるリンツの教会オルガニストに就任してプロの音楽家となり、さらに名教師たちから本格的な作曲の指導も受け、ミサ曲などの作曲で高い評価を得るようになる。その後ブルックナーは、他の追従を許さないオルガニストとしての腕と、厳格な指導によって身に付けた作曲理論とを武器に、音楽の都ウィーンに活動の中心を移す。しかしながらウィーンでは、作品を世に広めることはおろか、職を得ることにさえ苦労した。ようやく学校の音楽教師となるも、そのポストを組織改編で失ったりしたほか、念願かなってウィーン大学教授となるも当初は無給の待遇であるなど、収入面でも苦労した。またブルックナーは、ヴァーグナーに心酔していることを公言していたが、これも不利に働いた。ウィーンにはヴァーグナーを嫌う人が多かったのだ。純朴なブルックナーは、帝都で狡猾に生き抜くのには向いていなかったようだ。にもかかわらず、ブルックナーは何だかんだウィーンの音楽界を生き抜いて晩年には成功を収め、皇帝に作品(交響曲第8番)を献呈するまでになる。これは、周囲の助けに恵まれたことが大きい。農村育ちの素朴な中年男ブルックナーの立ち居振る舞いは、人をうわべだけで判断する輩からは嘲笑された。しかし一方で、その人間的魅力に気付いた人を熱狂的な信奉者にしてしまう深みのある人物でもあったようだ。たとえば、ブルックナーは職場のウィーン大学に近いアパートに住むようになるが、これはブルックナーに心酔する資産家が無償で提供したものだ。あるいは、“最後の晩餐”の使徒の絵を描くために、ブルックナー

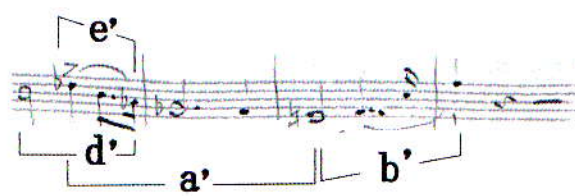
をモデルにした画家もいる。ブルックナーはこうした人々に支えられていた。ともかくこのような、ウィーンに拠点を移したものの職を失うなど困窮を極めていた、51歳から54歳の頃に交響曲第5番は作曲された。苦悩の吐露、神にすぎる心情、自分を助けてくれる友人たちの温かさ、それらが反映されていると言える。

そして、ブルックナーの作品群の中でも、交響曲第5番は特に重要な立ち位置を占めている。ブルックナーの初期の交響曲は、たくさんの短いブロックが休止を挟んで並べられている、という特徴を持っていた。短い讚美歌を歌った後、沈黙して司祭の説教に耳を傾け、また讚美歌を歌う、というミサの形態がそのまま交響曲になってしまったようだ。それが後期になると、尊敬するヴァーグナーが得意とした、まるで永遠に続くかと思われるほど途切れることなく流れる音楽をも書くようになる。交響曲第5番は、初期と後期の過渡期的な作品である。音楽の構成要素は短い讚美歌風のものであるが、それらが連なって長大な奔流となる、他に類を見ない大作である。ブルックナー自身も出来栄えに満足していたようで、この曲を“Fantastische”と自ら呼んだ。この語はほとんどの本で「幻想的」と訳されているが(ベルリオーズ『幻想交響曲』からの連想か?)、ここは川崎高伸氏(関西が世界に誇るブルックナー研究家)が言うように「素晴らしい!」の訳を充てるべきだろう。この自信作をブルックナーは、生涯聴くことができなかった。ブルックナーが亡くなる2年前の1894年によりやく初演されたが、病身のブルックナーは初演に立ち会えなかったのだ。なお、この初演は、ブルックナーの愛弟子フランツ・シャルク(“帝王”ヘルベルト・フォン・カラヤンの師匠となる人)が、オーケストレーションを大幅に変更し、しかも20分ほど短くなるようにカットしたうえで指揮した。ブルックナーが初演に立ち会わなかったのはシャルクの編曲への抗議のためだという穿った見方もあるが、僕はこの説を採らない。初演がなされたグラーツはウィーンから一山超えたところにあり、特急列車が発達した現代でさえも遠く感じる。病気がちの老ブルックナーにグラーツまでの大旅行ができるはずがない。シャルクは先述したようなブルックナーの熱烈な信奉者の一人である。時代の流行から乖離した素朴で豪快な響きを持つブルックナーの音楽を、響きがより華麗で洗練されたものなるように編曲し、当時の聴衆に強い印象を残すようにしたのは、師ブルックナーの作品を普及させようとする奉仕精神の賜物である。ブルックナーもまた、弟子の愛情を理解していたはずだ。なお本日は、シャルクの編曲版ではなく、ブルックナーのオリジナルの楽譜に基づいて演奏する。

第1楽章は、ブルックナーとしては異例なことに、アダージョの序奏から始まる。冒頭は弦楽器のみの素朴な音色で、バロック音楽のように緻密な音楽が静かに展開される(譜例2)。もちろん、この冒頭に全曲の主要な要素が凝縮されている。構成要素に仮の名称を付けて分析してみたい。伴奏は低弦のピッツィカートによる単純な下降音型と上昇音型だが、これが長大な曲全体に頻出する。天から地に降りてくるような下降音型(要素a)は、慈悲深い神の象徴だろうか。逆に上昇音型(要素b)は天に坐す神を仰ぎ見るようで、祈りの主題と言えよう。そして要素cは、音符がジグザグに上下する。第2楽章ではこのジグザグの幅が広がって音符が十字架を描いており(譜例7)、信仰告白的な要素であることがわかる。要素dは4分音符がうねるように配された旋律、要素eは長い音符と短い音符の取り合わせで、ともに動的な印象を与えるものである。そして、要素fのように、音符が小節線をまたいでタイでつなげられることでシンコペーションが形成されている。シンコペーションもこの曲に頻出する重要な要素である。



譜例2 冒頭付近



譜例3 第1楽章第1主題

90分近いこの大曲はすべて、この冒頭に示された要素によってつくられていると言って過言でない。例えばこの序奏に続いて出てくるアレグロの第1主題(譜例3)は、うねるような要素dの旋律と、要素eの鋭いリズムの変化形から始まり、要素aの下降音型、要素bの上昇音型へと受け継がれる。また第2主題は、要素fのシンコペーションが重要な働きをする。以後、文章には書かないが、譜例を見て頂ければ、ほとんどの主題が冒頭の要素から成り立っていることをご理解いただけると思う。もっとも、聴きながら「えーっと、今の主題は冒頭のこの要素とあの要素の組み合わせ、なのかな？」などと分析しながら聴く必要など全く無い。ただ、表情が激しく変転するこの大曲が、しかしながら決して散漫な印象を与えず奇跡的な統一感が保たれている背景には、ブルックナーの緻密な計算が働いているのだ、ということを知っておいていただけたら幸いである。

また、金管による壮麗なファンファーレやコラール(讚美歌風の旋律)が聴かれるのもこの楽章の特徴である。交響曲第5番は、ブルックナーがチューバを初めて使用した曲であり(こう書くと「4番にチューバを使っているではないか」と思われる方もいようが、4番にチューバが書き加えられたのは、5番の完成後になされた改訂においてである)、その効果が存分に発揮されている。

主題を3つ持つという、ブルックナー得意の拡大されたソナタ形式を取り、迷宮のような複雑な様相を呈する。しかし最後は、フル・オーケストラのユニゾンで、簡潔かつ豪快に4分音符を打ち込んで終わる。この4分音符は、3回+2回の組み合わせで打ち込まれるが(譜例4)、これは「ブルックナー・リズム」とさえ言われる、ブルックナーが偏愛したリズムである。

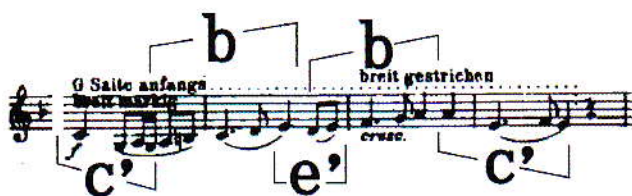


譜例4 第1楽章の最後

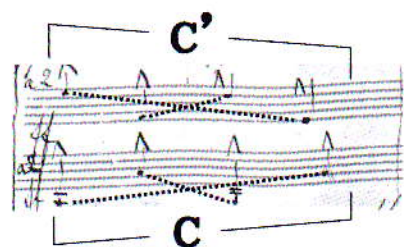


譜例5 第2楽章第1主題

第2楽章は、アダージョという遅いテンポが指定された雄大な楽章。冒頭は、3拍子の伴奏の上で2拍子系の旋律が歌っており(譜例5)、前述のブルックナー・リズム(譜例4)の要素である「3」と「2」を同時並行させたものと言える。この複雑なリズムの衝突が、偶然性の芸術を先取りしたかのような、前衛的で不可思議な雰囲気醸し出す。続く第2主題はブルックナーが書いた最も雄渾な旋律の一つ(譜例6)。楽章のクライマックスでは、要素cがはっきりとした十字架の形を表しており(譜例7)、鬼気迫るような迫力で神に祈りをささげるブルックナーの姿が浮かんでくる。交響曲第5番が、ブルックナーが最も困難な時期に書かれたものであることは前述したが、この曲はこの第2楽章から書き始められた。そうしたこともあって、ブルックナーの苦しさが直截に表現されていると考えられる。



譜例6 第2楽章第2主題



譜例7 第2楽章の十字架音型

なお、この第2楽章のみ、チューバが使用されていない。この理由には、トロンボーンとの関連があろう。トロンボーンは、神を象徴する楽器として宗教音楽を中心に使われる、特別に神秘的な雰囲気をもった楽器であった。しかしチューバが導入されてトロンボーンの下支えをするようになると、コントラバスに音色が似ているチューバが橋頭保となって、トロンボーンが弦楽オーケストラと馴染むようになったのだ。これは、トロンボーンがオーケストラ楽器として定着するのを促すが、同時に、トロンボーンの神聖な特殊性を薄めることにもなりかねない。ブルックナーは後期の交響曲でも、神聖な雰囲気を作る場面では、チューバを加えないトロンボーン3本のみの響きを多用した(7番の第1楽章はその典型)。特別に神聖なこの第2楽章のみチューバが用いられていないのは、トロンボーンを持つ宗教性を強調するためだと思う。

第3楽章はスケルツォで、「スケルツォ主部—トリオ(中間部)—スケルツォ主部」という3部形式を取る。スケルツォとは「諧謔的な音楽」という意味で、スケルツォを豪快に生命力豊かに描き出すことについて、ブルックナーは生前から評価が高かった。酒場を盛り上げていた父の姿が投影されているのかもしれない。ブルックナー自身も、記憶を失くすまでビールをあおるほどの大酒飲みであったという。純朴な信仰者としてのブルックナーとはまた違った一面だ。

この5番のスケルツォは、複雑さの点で他のブルックナーの交響曲とは様相を異にする。ブルックナーの、特に後期の交響曲では、スケルツォが4小節単位のブロックの連続でできた簡潔な様相を呈する。これに対し、5番のスケルツォは、表情も長さも大きく異なる多様なブロックがつなぎ合わされており、迷宮に迷い込んだような不思議な印象を受ける。

また、冒頭(譜例8)は第2楽章の冒頭(譜例5)と全く同じ伴奏音型で始まっており、いわば第2楽章と双子の関係になっている点も面白い。このスケルツォには、細分化された要素が飛び交うミニマル・ミュージックを先取りしたような箇所があり、そのように前衛性を強く感じさせる点も第2楽章と共通する。

ただし、田舎人が豪快に踊り騒ぐような粗野な力強さ、というブルックナーのスケルツォに共通する魅力は、この5番においても同じである。全体に宗教的色彩の強いこの曲の中で、世俗的な楽しさを持つこうしたスケルツォが挿入されていることは、作品の多様な深みを増すうえで極めて効果的である。しかし、このスケルツォの中にも、信仰者ブルックナーの横顔が見える瞬間がある。スケルツォ主部の終盤では、**譜例9**のように第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが逆行し、十字架を描いている(楽譜を重ねてみると良く分かる)。畑の中にまで祈りの場を設ける、日常と信仰が不可分になった農民の姿を髣髴とさせる。



譜例8 第3楽章冒頭

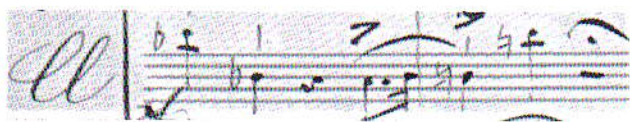
譜例9 スケルツォ主部の最後付近。両ヴァイオリンの楽譜とその合成

中間部(トリオ)は田園情緒あふれる明るい音楽で、やはり陽気に踊る田舎人たちを髣髴とさせる。終盤になると、その舞曲にトロンボーンや低弦まで加わるが、農夫たちが巨体を揺らして踊りの輪に闖入しているかのように微笑ましい。

トリオの後は、スケルツォ主部がそっくりそのままダ・カーポされる。ブルックナーは、初期の交響曲ではスケルツォの最後にコーダを付けていたが、5番以降はコーダの無い単純なダ・カーポを徹底するようになる。完璧なシンメトリーであるからこそ、鏡の中に入ったかのような無限の広がりを獲得していると言える(音楽愛

好者仲間・千葉尚邦氏のご教示)。スケルツォ主部の迷宮のような複雑さと、それがシンメトリーを形成する単純さ、この2つを止揚した破格の楽章である。

第4楽章の冒頭は、第1楽章冒頭(譜例2)をまるでコピー&ペーストしたように始まり、さらに第1楽章の第1主題(譜例3)と第2楽章(譜例5)の冒頭をこれまたコピーしたように再現する。こうした先行楽章のコピーは、交響曲第3番(初稿)をはじめ、ブルックナーの初期の作品に見られる技法である。前述のように、この曲は、冒頭で示された要素によって全てが構築されていると言って良い。こうした先行楽章の再現には、この大曲が統一感を持った巨大な有機体である、ということを再認識できる効果がある。ただしこの再現には、譜例10で示したクラリネット・ソロとその断片が加えられている。この譜例10が主題に発展して、雄渾なフーガが展開される(第1主題部)。フーガが収束すると、花園のような優しげな音楽と、神の怒りのような厳しい音楽とが対置される(第2・第3主題部)。これが静かに収束すると、そこへ忽然と、金管のみの豪快な音色によるコラール(譜例11)が屹立する。おそらく全曲の中でも最も強い印象を与える場面であろう。この譜例11のコラール主題が再びフーガへと発展する。つまりこの楽章は、2つものフーガを備えていることになる。フーガとは、主題を少しずつずらして何度も繰り返し演奏する形式である。ずらされた主題が複雑に絡み合いながら混乱なく音楽として展開しており、そこに人間の気まぐれな感情が入り込む余地はない。いわば人間を超えたところにある、神に捧げるにふさわしい至高の音楽形式である。2度目のフーガは、第3楽章と同様にミニマル・ミュージックのような前衛性を見せた後、圧倒的な頂点を築いて収束する。その後は、第2・第3主題部が再現され、さらに第1楽章の第1主題(譜例3)も再現されて大曲の冒頭につながり、まるでメビウスの輪が切り広げられた瞬間のように巨大なループが完成する。最後は、ブルックナー自身が楽譜に「コラール」と書き込んだ讃美歌風のコーダとなる。譜例10と譜例11の2つのフーガ主題を基調としながらも、要素aの神の主題や要素bの祈りの主題などが飛び交い、壮麗な空間が広がる。ブルックナーの書いた音楽の中でも、とりわけ幸福感にあふれ、そして勇気づけられる音楽である。少なくともこの響きの中にいる間は、(信仰の有無の如何にかかわらず、)この世には身を任せるに足るもの、信じるに足るものが確かに存在するのだ、という気持ちになれる。そして最後は、覇気に満ちたブルックナー・リズム(譜例4と同じ)によって締めくくられる。



譜例10 第4楽章 最初のフーガ主題



譜例11 第4楽章 2度目のフーガ主題

この荘厳な音楽を体験した人は誰しも、人生が変わるほどの衝撃を受けるに違いない・・・と、つつい書きたくなってしまいが、もちろん、音楽を聴いて人生が変わるわけではない。どんなに素晴らしい芸術に接したとしても、結局、日常生活の厳しさは変わらない。ただ、「わずか」1時間半ではあるが、ブルックナーを聴いている間は、確実に救われるという安心感・幸福感があった。この先も生きていけば、またこんな幸せを感じる瞬間があるかも。」と思うことができれば、それで十分に素晴らしいことだと思う。冒頭の『不機嫌な姫とブルックナー団』でも、主人公の不満だらけの日常は最後まで変わらない。しかし彼女は、ブルックナー愛と、そこから派生した小さな楽しみによって、ささやかな幸福を感じる日々を送っていく。それでいい。毎日を送る中で、時としてささやかな幸せがある。それは十分に幸福な人生であろう。そして、「またブルックナーを聴きたい」という気持ちが、「生きる」というささやかな幸福を続けていこうとする力になると僕は信じる。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第45回定期演奏会♪

2019年6月16日(日) 大津市民会館 指揮：木下 麻由加

ベルリオーズ/序曲『海賊』

シューマン/交響曲第4番(初稿)

ニルセン/交響曲第2番『4つの気質』

(予定)

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。遠方からの参加も歓迎します。関西地区以外の方々もご興味があればぜひご連絡ください！

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス **(ヴァイオリン・ヴィオラ急募！)**

フルート・オーボエ・ファゴット **(ファゴット急募！)**

ホルン・トランペット・打楽器 ※フルートと打楽器は、諸条件について要相談

〔参加資格〕 特にありませんが練習に出席できること。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 原則日曜日(午後1～5時)、春と秋に合宿練習(滋賀県内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、伏見区など京都市内の各所のほか、大津市など。

〔諸費用〕 団費3000円/月(学生は1000円)、演奏会参加費など

※遠距離割引、学生割引、家族割引などあり(ご相談ください)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophilo.com

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています

〔年会費〕 1口 1,000円

〔期間〕 ご入会いただいた月より1年間

- 〔特典〕
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
 2. その他演奏活動のご案内
 3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel & Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。